
だから僕は君のことを美しいと思うんだ

踏鞴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

だから僕は君のことを美しいと思うんだ

【Nコード】

N0001W

【作者名】

踏鞴

【あらすじ】

彼女は美しかった。とても、とても美しかった。そんな彼女のそばに居たくて僕は彼女に正式な交際をお願いする。「僕はあなたのことが好」「死ね」あなたの声が聞けて嬉しいな！

これはそんな僕と彼女が作り出すちよろつと恐い物語。苦手な人は見なくていいぜ！

そして頑張つてピッタリ一万字にしました！ 誤字脱字の指摘は大歓迎ですがあんまり多いと一万字にきれない場合がございますのでお手柔らかにお願いします。

美しいものの基準ってなんだろうか。

僕は時々考える時がある。

勿論それは自分が直感的に感じるからだから、理由付けなんて無粋だとは思う。でも、そうならなぜ僕らは基本的には同じ様な物を美しいと感じるのだろうか？ 野に咲く花を美しいと感じたり、テレビに出ている女性を美しいと感じたり、美術館に展示してある作品を美しいと感じたり。

どうやらそれはどっかの国の偉い人曰くイデアのなんたらがなかったらしいとか。駄目だ、まったく説明になってない。

しかしその『美しい』の中に例外的に少しだけ他とずれているものがあると僕は思う。

人間の美だ。

人間の美は他と違って『その先』がある。

美しい、だから愛す。だ。

そして人間の美は変わる。美しい花は500年前でも美しかったかも知れないが、美しい絵画はどの時代でも評価されるだろうが、ところがどっこい人間はそうはいかない。いつてくれない。

まあ皆知ってるだろうけれど今の美人は昔の美人じゃない。昔の美人も現代に連れてくれば当時ほどもてはやされたりもしないだろう。未来も然り。

そこまで昔に遡らなくても良い。80年代アイドルとかを見てみる。当時と同じ髪型、同じ服装で町にでも出ようものなら確実に笑われる。

つまり僕が言いたいのはなんだ、美人とは個人が決める物でなく、大衆がなんとなく決めるもの。もしくはそのときその時代の声の大きな人が決める物なのだ。多分。

そして僕はそれに逆らいたいと思う。幼い頃からサブリミナル的

に頭に叩き込まれた『美人』を一度大体全部取っ払って、僕は自分の目で世界を見たい。もとい女性を見たい。変な意味じゃなく。これでも一応16歳。世間様のあれこれに反抗したい年頃としては真っ当だろう。

そんな訳で、

そう言う訳で、

僕は今ここに居たりする。

舞台は学校。役者は僕と同じ学年の隣のクラス、駒ヶ浦さんこまがうら。もちろんここから先のストーリーは決まっている。ただ、緊張して声が出ないだけだ。

何をしている僕！ 声を出せ！ 彼女に伝えろ！ 告白しに来たんだろうが！

僕は痛々しいほどに両腕を握りしめ、震える声を必死に抑え、できるだけ平静を装いながら、ゆっくりと告白した。

「駒ヶ浦さん、僕はあなたのことが好」「死ね」

告白から数えてマイナス3秒。僕のこの早すぎる撃沈に涙しない人はいなかった。（嘘）

「一体何がいけなかったんだろうか……」

放課後一人で反省会。議題は勿論僕の早すぎる死について（精神的な意味で）。

僕は今教室なのだか授業が終わったにも関わらず未だに残っている生徒が10名ほどいて若干ウザイ。しかも大半が女子と来た。まあ女子限定ではないのだから人間と言うやつはなぜかしら群れると五月蠅くなる。普段は大人しいやつでも馬鹿みたいに大声で喋るのでこっちの存在がない物にされているのではないかと思う。

そんなことより。

「一体何がいけなかったのだろうか……」

早くも行き詰ってしまった。残念ながら僕は恋愛方面に明るい方じゃないので失敗した理由がとんと掴めない。

しかし彼女も断るのが素早かったなあ。そりやあもう惚れ惚れするぐらい。だって「僕はあなたのことがす」までしか言っていないのに。ここから先、好き以外のべつのことを僕が言おうとしてたらどうするつもりだったんだろうか？

例えば、「僕は君のことが鈴木さんだと思ってました」……文法的に変だな。

「僕は君の琴が杉で出来てることを知っています」……だからなんだ。というかなんで知ってるんだという話になるな。

「僕は君のコートがすつごく欲しいです」……彼女の職業がコート職人でもない限り通報ものだ。

「僕は黄身の事が寿司より好きです」……へえ。

考えてみれば、確かにそれ以降がどんな言葉であっても返答としては概ね「死ね」でよかった。流石駒ヶ浦さん。頭が良いなあ。

「ねえねえ」

と、ここで多分僕に向けてであろう声が聞こえた。声のした方向を見ると、先ほどまでウザイと心の中で罵っていた女子数名が僕の方に話しかけてきている。どという状況だ？

「な、何かな？」

若干引きつらせながらも、笑顔で応答する。さっきまでうるさくしていてもそれはそれだ。僕に興味のベクトルが向いているならならんら問題はない。僕は自分に好意を抱いてくれている人間には誰であつても優しいのだ。例えそれが一時的で不快極まりない話の内容だったとしても。

「さっき駒ヶ浦さんに告白したんでしょー？」

語尾を延ばして女子Aが楽しげに聞いて来た。でも残念ながらそれは事実ではない。告白しようとする前に玉砕した。本当はあの後

に「きです。良かったら友達からでも良いので僕と交際をしてくれないでしょうか」が続く筈だった。何だコレ。結局本文の三分の一を言ったところで振られたのか。なんだったんだ僕の告白の台詞を考えていた1ヶ月と、緊張して眠れなかったかった3日間。ついでに告白の練習相手になつてくれた理科室の人体模型さんにも申し訳ない。出来れば良い結果を聞かせたかった。

「ああうん。そうだよ」

それでも一応肯定しておく。ここで今思ったことを言おうとする
と面倒な上に笑われてしまうことが必至だ。

舌がだんだん調子に乗ってきた。続けて僕は言う。

「でも振られちゃってね。どうして駄目だったのか今一人で悶々と
していたところだよ」

「それは時間と場所に問題があつたのでは……」

さつきとは違う女子がバツが悪そうに呟いた。

いや、でも時間も場所もさして問題があつたとは思えないけどな
あ。場所はスタンダードに彼女の教室だったし時間は普通に5時間
目と6時間目の間の十分休憩を利用させてもらった。問題となる点
がさっぱり分らない。

「いや、告白つてそんな教科書借りるみたいなノリですもんじゃ
ないでしょ」

「教科書借りるノリつて、失礼な。ちゃんと誠意を込めて告白した
つもりだったけど。告白の台詞だつて1ヶ月かけて考えたし」

「いや、告白の台詞考える前にまずはTPOを考えようよ」

なんじゃそら。教師と保護者の会か？　つてそれはPTA。……
自分で言うのは哀しいな。

「じゃあ例えばどんなシチュレーションで、いつ告白すればいいん
だと思う？」

最早自分で考えるのは諦めて女性陣に聞く。まあ男性の僕が一人
で考えてるよりは数段有益な情報が手に入るだろう。僕がそう聞く
と女の子達は嬉々として次々に話し始めた。

「やっぱり放課後とかが良いよねー」

「場所は屋上とか？」

「友達でもない間柄なら呼び出すの？」

「手紙？ 下駄箱に？ なんか古くない？」

「いやいやここは男らしく全校放送で告白とか」

「それはちよつと不味いんじゃない？ だって一度振られてるわけだし」

と、最初の方は僕の告白について考えてくれた彼女達だが、段々に話は逸れ、理想の告白のシチュエーションへと議題はメタモルフオーゼしていた。世界の中心で愛を叫ぶって……無理だろ。確か地球の中心部はマグマどろどろだ。まずもってたどり着けない。確かにそこに行くまでの七難八苦はつり橋効果を存分に発揮してくれそうではあるが、その前に死んでしまつては意味がない。リスクでさえ。いや、そうするとリターンも大きいのか？ 確かにたどり着けさえすれば勇者だからなあ。

そんな感じで僕が考察している間にも彼女らの話は逸れに逸れ、もう軌道修正はほぼ不可能そうだった。なんで今生物の先生の話になつたんだ？

「じゃあ僕はそろそろ行くよ。助言、どうもありがとう」

全く役に立たなかつたけどね。

そんな言葉を押さえ込み、恐らくは聞いてないであろう彼女達に向かつて一応礼儀であるので形だけお礼を言つてその場を去ろうとした。

「あ、ちよつと待って」

聞いてたのかよ。

危うく出そうになつたその言葉を頑張つて飲み込み、さわやかな青少年が小学生を相手にしているような困った笑みを浮かべながら僕は聞き返す。

「ん？」

すると、最初に僕に話しかけてきた子がさも言い辛そうに、いい

子ぶつてもじもじしながら声帯を震わさんと頑張る。イラッ。

「あの、その……なんで駒ヶ浦さんなのかなあって、ちよつと気になって。ほら、駒ヶ浦さん、あんまり良い話聞かないでしょ？ それに変な噂とかも流れてるし……」

そうなのだ。

駒ヶ浦さんはこの学校では少しばかり有名な問題児であつた。人と関りを持たない上、時には暴力事件まで起こしている彼女は生徒はおるか、教員からも敬遠されている。その15歳の問題児の少女は影でひっそり「黒髪の魔女」と言う結構厨二チックなあだ名を付けられている。と言うか全校生徒の100%が黒髪なのになのあだ名はないだろうと聞いてすぐの僕は思った。それでも本校に通う生徒は多かれ少なかれ「駒ヶ浦には近づくな」という信念を持っていたりする。

しかし、

それでも僕は駒ヶ浦さんにお近づきになりたかつた。

どこを見ても真つ白な羊の群れ。その羊はひしめき合うように存在して、羊一匹一匹がまともに動けないほど。しかしその中にポツンと大きな円が。その円の中心には白い羊を蹴散らし、居心地悪そうに眠る一匹の女狼。それが駒ヶ浦さんの僕のイメージ。うーん、かつこいい。

「ああ噂？ 僕は気にしないことにしてるから」

嘘である。彼女のある噂がなかったら僕は彼女に告白なんてしていなかっただろう。

「へえ……そお」

そんな感じで曖昧に頷く女子A。

「じゃあこれで、本当にありがとね」

今度はちゃんと聞こえるように笑いながらみんなに言う。いうなればスポーツマンの先輩が後輩のミスに対しフォローするような笑顔だ。ドンマイドンマイ、次決めていこう。

よし、女心も分かったことだし（嘘）今度は男らしく告白してみ

るか。丁度今は放課後だ。時間的には問題ないだろう。

「好きだ。付き合ってくれ」「全身が焼け爛れればいいのに」

あれ？ 時間的な問題は解決した筈なのに。それに言い方ももっと直接的に変えたただけだなあ。あ、でも今回は全部言えたし「死ね」からまだ生きてる可能性があるいい方に変わったぞ。進歩進歩。「なんで満足そうな顔してるのよ。変態？」

彼女が本当に気持ち悪そうな目でこっちを見てくる。いやあ僕は彼女と話せてるだけで幸せだし。

「って言うかなんでさっき断ったのに日付も変わってないうちから再度告白するのよ。何その無駄なチャレンジ精神」

「いやあ、時間が悪かったのかなあとと思って」

「時間も場所も最悪だったけどもっと悪かったのはあなたが告白したこと事態ね」

「はっはっは」

「笑って誤魔化すな」

「じゃあどうすれば君が僕に振り向いてくれるかな」

「突然大声でも出せば驚いて振り向くぐらいのことはするんじゃないかしら？」

「いや、そう言う意味じゃなくて」

「今この場で私の靴の裏でも舐めたら考えてあげても良いわよ」

「え？」

「冗談よ　ってなんでしゃがみこんでるのよ！」

「いや、君が」

「冗談に決まってるでしょ！　なんで思考時間ゼロでそう言う結論にたどり着くのよ！　考えられない！　変態！　こっちくるな！」

なんかますます嫌われてしまった。おかしいなあ、どこで間違っただろう。

そんなことを考えている間に駒ヶ浦さんは回れ右をして僕に背を向けてすたすたと昇降口まで歩き出してしまった。うーん、歩いている姿も絵になるなあ。

そう言う訳で僕は靴を履き替えた駒ヶ浦さんにぴよぴよこと付いていく。

「何が『そう言う訳で』よ。全く関係ないじゃない。付いてこないで」「いや、それより地の文を読まないで」

昇降口を抜け、一般道に入る駒ヶ浦さん。僕もその1m後についていく。

「付いてこないでって言ってるでしょ」

「僕も家がこっちなんだ」

「あらそれは残念ね。私はこっちだわ」
くるり。彼女が180度方向転換。

「あ、そういうば僕も今日はこっちだった」
くるり。僕も彼女にならない方向転換。

「今日はってどういうことよ！ 一日ごとに家が変わるか！ 付いてくるなストーカー！」

「大丈夫！ いざとなったら公園とか公道でさえも僕の家だから！」

「こないでホームレス！」

彼女ダッシュ。僕も負けじと走る。でも残念ながら彼女は女性にしても体力のないほうらしく100mもいかないところで息が切れてしまった。道路に両肘を着いて荒い息を整える。対して僕の方は一応運動部所属だし男の子なのでこの程度では全然平気だったり。

「はあ、はあ、はあ」

「……ご趣味は？」

「なんでこの状況でお見合いの常套句を！？」

「なんか話してないと落ち着かないんだ」

「子どもみたいね……バーカ死ね」

そう言う駒ヶ浦さんの方がよっぽど子どもっぽいよ。なんていえるはずもなく。

「部活動って何やってんの？」

「人に部活動聞くときは自分から言えって両親に習わなかった？」

いや、習わなかったけど。

それは多分名前。

「……私は」

沈黙に耐えられなかったのかそれとも折れたのか、彼女が話し出す。まあたとえ彼女の部活動がなんであろうとその次の僕の台詞は決まっている。「あ、僕と一緒に」だ。そこから会話を広げていくつもり。男子部と女子部は基本的に練習別物だから多分ばれない。文化部だったら終わりだけど確か彼女は運動部って前に聞いたことがあるような。

「チアリーディング部の幽霊部員よ」「あ、僕と一緒に……なんでもありません」

まさかのチアだった。別に全国に男性のチア部の人がないって訳でもないのだけれど僕の学校には全国の平均的な例に漏れずに女性しかないのここで嘘をついても絶対にばれる気がした。というか絶対ばれる。

そもそも彼女幽霊部員だし。会話が広がらないこと山の如し。

「聞きたいことは済んだ？　じゃあさっさと帰ってくれろ？」

彼女が道の前方に手を指し示し言う。そういえば家とは真逆の方向歩いているから彼女もそろそろいつものどおりの通学路に戻りたいのかもしれない。

「あ、うん。じゃあまた明日ねー！」

僕はいい加減に怒り出してしまいそんな彼女を尻目に走りながらその場を去る。

「ある訳ねーだろ！」

そんな彼女の声は当然ながら無視をする。

次の日の放課後、彼女を見かけた。

と言いかまあ校門前でずっと待ってただけなんだけど。

「ああー！ 駒ヶ浦さんじゃないかー！ こんな所で会うなんて偶然にも程があるね！ そうだ！ 良かったら結婚してくれない！？」

「なんで付き合うことから数段すっ飛ばしてんだよ！ つーか昨日二回も断っただろうが！」

彼女の言葉遣いが段々悪くなっている気がした。僕のせいだけど。

「一緒に帰ろう！」

「私の言葉は無視！？」

別に無視しているわけじゃない。ちゃんと聞いて理解した上で聞かなかったことにしたいるだけだ。

「意味的にはあんまり変わらないわよ」

「僕の中ではだいぶ違う」

「おめでたい脳味噌してるのね」

「それだけが取り柄ですから」

「どうかしら、私は別に褒めているつもりはなかったけれど」

一見嫌われているように見えるこの一連の会話。しかしながらこれがそうでもなかったりする。普通なら彼女は嫌っている人とかには徹底的に無視したりはたまた暴力行為に及んだりする。というか彼女が誰かとこんなに長い時間喋っているということ事態驚くべきことであつたり。

「駒ヶ浦さん、一緒に帰ろう！」

僕はさっきの言葉をもう一度繰り返して言う。

「良いわよ」

「そんな事いわずに……え？」

承諾してくれた。言い方が堅苦しいか。良いってさ。

「でも今から帰るわけじゃないわ」

「えーとそれはどういう？」

まさかここでいきなり「デートしましょう」なんて展開が待ち構えているわけでもないだろうに。さしもの僕でもそんなに能天気ではない。でも突然舞い降りたこの幸福な出来事に頭が全く付いていなくて僕は僕らしくもなくしどろもどろになってしまった。

「付いてきなさい。私の日課につき合わせてあげる」

「おう？ ……ああ」

なんとも間抜けな返事になってしまったが仕方がない。どういう状況だこれ？

「……ああ、成る程。……これを僕に見せたかったわけね」

僕のこのテンションで分かってもらえたかと思うが、彼女に誰も知らない絶景ポイントに連れて行ってもらったとか盗んだバイクで走りだすとかなんか青春的な、それでなくてもなにか僕にとってプラスになる要素のある物を彼女に見せられた訳ではなかった。

というかまんま逆。

僕は今、今年度一番気分が悪い状況に立たされていた。因みに昨年度はチャリで転んで左手薬指と小指を骨折したのがワースト。

現在僕は彼女についてきて学校から徒歩20分のところにある山に来ていた。皆さんのイメージしている通り周りには自然しかなく、人間は僕らしか居ない。

「……ふふふ」

なんかもう彼女、自分の世界に没頭してしまって僕のことを完全

に忘れているようだ。まあ何かに没頭している彼女を見るのは嫌いではないがそれにしてもこれはちよつと僕の許容範囲を超えていた。指の先についている返り血が禍々しい。

返り血が禍々しい。

多分この『返り血』って言葉を聞くとどこにも殺人を連想する人が多そうだけどそうではない。でも惜しい。犯罪って意味では概ね正解と言えよう。

では殺人ではないとしたら彼女は一体今何をしているのだろうか？ 答えは彼女の手元にある。

そこには一匹の犬。元犬。

今ではただの肉片だ。

あーつまりなんだ、極端に言う動物愛護法にばっちり引っかかる犯罪者。

こんなことが趣味なのねまあ素敵。そんな風に彼女に言おうと思つたがなかなか口が開いてくれない。どっちにしろ無視されてるから同じか。

「私ね」

おもむろに彼女の方から話し始める。多分今世紀初めて観測された現象であつて今現在僕の心はそれなり以上に高ぶっている。言い方がまどろっこしいか。彼女の方から話を振ってきてくれてすげえ嬉しい。

「私、小さい頃から虫を殺すのが趣味だったのよ。殺虫剤とか使うんじゃない、水とかあとやんわり踏み潰したりしてじつくり殺すんだけど」

とても嫌な子どもだった。いや、小学生程度ならそんな感じの男の子とかはいいたか。

それより僕は彼女の幼年期を想像、もとい妄想してしまつて一人二ヤ付いていた。

「嫌な子どもよね、自分でもそう思うわ。でもその頃はどうせ成長するにつれ、こんな趣味なくなるもんだとばかり思っていて特に気

にもしてなかったわ。

でも、小学生の5年生ごろで気づいたの。あれ？ これ悪化してない？」

小五か。遅いんだか早いんだか。まあ遅かったんだろうけど。

「まあ気づいた時には時すでに遅しって感じよね。それ以降暴力衝動が出てきたときにはここに来て手ごろにいる生き物を殺してるの」

「……はあ」

で、だからなんだ。まさか彼女が「私の全てを知ってもらいたかったの」とかいう訳でもあるまいし。もしそうならいいなあ。嬉しくて卒倒しそうだけど。

「だから私のはこれ以上近づかないで。話しかけないで。私を見ないで」

「僕に死ねというのですか！？」

何故かいきなり僕に処刑命令が下っていた。彼女の命令ならそれもやぶさかではないが、これはあまりにも理不尽すぎる。僕にだって発言の権利くらいはあるう。

「えーと、というか駒ヶ浦さん？ 話が全く繋がらないのですが」

僕がそう言っていると彼女は「はあ、コイツ馬鹿じゃないの？」と言う顔をした。90%ぐらいは正解だと思う。

「いいーい？ 私の近くにいたらいづれあなたも殺すわよ？ 私中学校の頃に大切にしていた猫も間違えて殺しちゃったこともあるし。多分高校生の今じゃあ殺人だってきつと躊躇なく出来る」

彼女が犬を殺す為に使った凶器、ナイフを握りしめながら言った。

「僕は別に構わないよ？ そりゃあいくらかは怖いけど君に殺されるだってんなら本望」

彼女は音もなく動いていた。

綺麗な足払いで僕を仰向けに倒したかと思えばそのまま僕のお腹に飛び乗りマウントポジションを取った。そしてすかさず僕が抵抗しないのを知ってかしらるか僕の両肩に握ってたナイフを一度つつ、しっかりと刺した。

「簡単にそんなこと言うんじゃないよ！ 誰だって死ぬのは恐ええだろうが！ 大した度胸もねえくせに悟ったように言ってるんじゃないよ！ ただの高校生が！」

ナイフはいつの間にか僕の首にあてがわれていた。しかしかなり乱暴にしているらしく、見なくても首から血が出ているのが分かる。「ほら！ 命乞いしてみろよ！ 泣き喚けよ！ 助けてくださいって言えよ！ そうじゃないと殺すぞ！」

それは脅しではなく、彼女が心から願っている願望だった。

本当は彼女もこんなコトはしたくないのだろう。きっとみんなと同じ様に普通に生きていきたかったに違いない。でも暴力衝動がその全てを壊している。

彼女の近くにある者は、彼女が全て壊してしまう。

たとえそれを彼女が望んでいなくとも。

「早く言えよっ！ 殺すぞっ！ 殺すぞっ！ 殺すぞっ！」

そうか。やっと分かった。

こんなに頑張っている。こんなに耐えている。こんなに苦しんでいる。

たとえ人が離れても、どんなに人に嫌われても。

他人のことを思っている。

だから彼女は美しいんだ。

「僕を殺せよっっっ！！！」

けど、僕はもうそんな彼女を見ていられなかった。

そんな美しい彼女を見ていられなかった。

たとえ美しくなくとも、それよりも大事なことがある気がした。

「もう我慢しなくて良い！ 遠慮しなくて良い！ そんな君は見たくない！ 僕を殺したいと思うなら殺せば良い！ 君は君のままで生きてくれっ！！！」

「ああああああああああああああああああああああああああああ

あああああああああああああああ！！！！」

彼女が叫んでいるのが遠くで聞こえる気がした。もう両肩から流れ出ている血が足りなくて意識がなくなってきた。首筋にある凶器も力がさつきより籠っている気がする。あ、その意識もなくなってきた。

もう死ぬのか。

最後に見えたのは彼女が僕の首からナイフを離し、大きく振りかぶっている様子だった。

「お前を　お前を殺したい筈ねえだろうが！」

僕が最後に聞いたのは、そんな彼女の声だった。
グサツ。

「ここは天国か！」

がばつと布団から飛び起きる。

「まず天国に布団つてあるのかしらね。随分和式なのねえ」

驚いたことに隣に彼女　駒ヶ浦さんがいた。

「あれ？」

よく落ち着いて見渡せば、見たことのない部屋に僕はいた。

窓からの景色を見る限りここは僕の住んでいる町らしかったが、僕の住んでいる地区ではない。

その部屋は、壁がクリーム色だったり、勉強机に小さな人形が並んでいたり、本棚には少女マンガがあったり、どうやら考えてみるに女の子の部屋らしかった。

「っていつか状況判断で考えてみる限り」「私の部屋よ」
彼女の部屋だった。

「ここは天国か！」

我が人生に一片の悔いなし。これこそ死んで本望だった。

……じゃあこの布団つて。……わあ、生きてればこんなことってあるんだなあ。

「顔がニヤ付いてるわよ。変なこと考えてるでしょ」

全くもって正解だった。

「つていうかよくここまで運べたね。男子を女子が運ぶのつて大変だったでしょ」

「人に頼むわけにはいかないでしょ。逮捕されるし。まあ運動は得意な方だし家は割りと近かったから問題なかったわ」

「ああ」

「それよりも時間が問題よねえ」

「ん？」

時計を見ると、11時を過ぎていた。

「やばっ！ 家族に電話！」

「携帯なら私が壊したわよ？」

「なんで!？」

「あなたの代わりに、グシャッとね」

「酷すぎるでしょ！ じゃあ君の貸して！」

「持ってないわ」

「……マジか」

諦めた。しかたない、たまにはこういうこともあるさ。大方うちの家族なら通報とかしなそうだしきつと大丈夫だろう。

彼女に向き直る。今気づいたのだが、簡易的に僕の両肩と首が包帯で巻かれていて、その治療の為か僕の上半身は裸だった。

「えーと、僕を殺さなかったんだよね？」

「それは私も死んでいるという仮説の元に質問しているのかしら？
だったら私はその仮説の対して憤怒を込めた『失礼な』と言う言葉を送りましょう」

簡単に言つとイエスらしい。というか言い方がまどろっこし過ぎる。

「なんで殺さなかったの？」

「あら、あなたって自殺志願者だったの？ 知らなかったわ」

「そうじゃないけど……」

彼女になら殺されても良いぜって言う話だ。

いや、でも殺さないのがベストだからまあ良いか。逆に「あなたの言葉に胸を打たれたわ、結婚しましょう」的な展開だったら嬉しい。まあないだろうけど。

「あなたは殺すわ」

どうやら僕は殺されるらしい。

「でも今じゃない。私が18歳になってちゃんと罪を罰として償える形になったらあなたを殺しましょう。それまでは人間は勿論他の動物も殺さないと言いましよう」

「できるの？」

「難しいかもしれないけれど、暴力衝動が出るたびにあなたの顔を思い出して我慢するわ。あなたを殺すまでってね」

嬉しいような嬉しくないような、微妙な立ち居地だ。

「よろしくね、ご褒美」

この日、僕に変なあだ名が付いた。

「おっはよー駒ヶ浦さん！」

朝、昇降口で靴を履き替えている駒ヶ浦さんを見かけ、声をかけた。

「ええ、おはよう」

その笑顔はとても、とても美しかった。

（後書き）

読んでくれてありがとうございます。感想を書いてくれたらとても嬉しいです。お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0001w/>

だから僕は君のことを美しいと思うんだ

2011年8月22日03時22分発行